

風
人



M. Motochika 

版
画

本
近

勝

はだか木

きさらぎの霜しろく置くはだか木が強く生きよとわれに語り来

明日

引き出しゆ夫のありし日の一葉の写真出できぬ明日は命日

独り居も慣れましたよと告げつつも夫ありし日へ思いは還る

奇蹟のみ信じて夫の再入院さくら葉さやぐ五月の朝^{あした}

のこさるる夫のいのちの渺なきを知りし翌日聞く 娘^この懐妊

娘^この懐妊よろこびませと夫に告げ君が余命の告知は告げず

夫と見る真夏の空は目に痛く添いいる窓辺そと離れたり

早朝に夫の急変告ぐる電話ナースの声を遠くに聞きぬ

案ずれど息子と交わす言葉なく夫の許へと車の遅し

君が為なす術もなく傍らにただおろおろと夫の名を呼ぶ

突然に夫の回りの騒立ちてナースらの足しげくなりたり

再びの夫の目覚めを請うわれに医師は真横に首を振りたり

事切れし刻より始まる弔いの仕度忙しき　うつろわが身に

むらさきのけむり一すじのぼりゆく夏祭りの天へ君の御魂は

からからと君がみ骨はわが胸に枯葉のごとく音をたていつ

生まれくる命ありけり消えゆきし尊き生命いのち　潮のみちひく